



新しい時代の専門家の在り方を示す

評者 田代志門 東北大学大学院文学研究科准教授・社会人間学

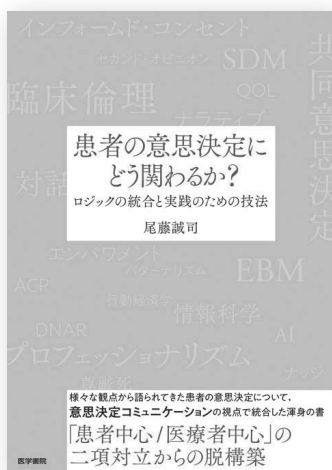
「臨床意思決定」のテキストの決定版であり、今後1つの基準となる本である。この半世紀で医療における意思決定の在り方は様変わりし、医師が患者の最善を考えて治療法を決めるスタイルから、医師からの情報提供を受けて患者が自身の治療法を決めるスタイルへと大きく変化した。

が、現実にはそう単純ではない。そう言われても自分1人で決めたい患者ばかりではないし、そもそも患者が決めても専門家としては提供できない医療もある。その結果、現在では医療者と患者が「共に考え、共に決める」という在り方が模索されている。本書は、この歩みをさまざまな研究領域を横断しつつ理論的にたどり、専門家の意思決定への関わり方を実践的に示したものである。とりわけ、理論編での「インフォームド・コンセント」「シェアード・ディシジョン・メイキング」「ナラティブ・アプローチ」の整理は秀逸であり、本書を一読すれば、かなり見渡しのよい地平から、これらの関係を理解することができる。

ところで、本書はテキストであると同時に明確な理論的主張をもった本でもある。その中心は、医療者を「支援者」ではなく「関与者」として捉える視点である。要は「意思決定の主体を患者に限定し、医療者はそれを“外側から”支援する」という一般的な考え方を否定し、医療者もまた意思決定に関与する「主体」として位置づけようという提案だ。それもあって本書では、一貫して「意思決定支援」という用語を使っていない。これは一歩踏み込んだ医療者の関わりを正面から肯定するモデルであり、ただしその一方で、やり方によっては“医療者中心”の意思決定へと「退行」しかねない立場でもある。

だからこそ、著者はそうならないための仕掛けを随所に効かせている。特にあの手この手で著者が説明するのは、医療者が前提としている価値が特殊なものであり、それは必ずしも患者にとっては優先すべき価値ではないこと、両者には対立があることを自覚すること（わかり合えないことをわかり合うこと）の重要性である。逆に言えば、専門家としての価値に基づいて特定の選択肢を推奨する、という形で意思決定に深く関与するからこそ、自分の価値に対する反省的な認識が不可欠となる、というわけである。ここには、新しい時代の専門家のモデルがある。

私たちは今、かつてないほど自由で不自由な社会に生きている。それぞれの自由な選択を表面的には尊重し、「自分で決めること」が至上の価値になる一方、それゆえに「自由に」他者と関わるのが難しくなっている（「人それぞれなんだから放っておけばよい」という圧力）。ここを抜け出して「少しおせっかいな社会」（清水哲郎）に向かうには、どのような論理と技法が必要だろうか？ 本書は専門家による意思決定への関与という主題に即して、この問いに対して1つの解を出した。その意味で、医療者向けのテキストとして書かれているものの、それを超えて広い読者に読まれることを期待したい。

患者の意思決定
にどう関わるか？ロジックの統合と
実践のための技法

尾藤誠司＝著

定価：4,180円（本体3,800円＋税10%）
A5判・248頁／医学書院／2023
[ISBN 978-4-260-05330-3]